

序

福岡市は、古くから中國大陸や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外貿易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のものに、市内には数多くの遺跡が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、博多区諸岡五丁目地内における共同住宅建設に先立ち実施した、篠原遺跡の第4次発掘調査について報告するものです。この調査では、主に古墳時代前期（3世紀後半～4世紀）の集落跡を検出し、同時に土器や鉄器などを出土しました。集落跡には、何度も建て替えられた堅穴住居群や、方形に区画する環濠が確認されました。古墳時代の方形環濠には小規模な掘立柱建物が伴い、「首長居館」ないし「祭祀場」の可能性が考えられ、継続的な祭祀が行われていたことが明らかになりました。また堅穴住居の一つには、当時まだ普及していないかった竈（カマド）が設置されたものが検出されました。これらの調査成果は、当遺跡が地域の歴史において重要なものであることを示す貴重な資料となっていました。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者様をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げる次第であります。

平成26年3月24日

福岡市教育委員會
教育長 酒井 龍彦

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成24年10月15日から同年2月21日まで発掘調査を実施した、共同住宅の建設に伴う、築原遺跡第4次調査の報告書である。なお、発掘調査費用は一部に国庫補助金を適用している。
 2. 発掘調査は、其共同住宅建設工事によって遭難が想定される範囲について行ったが、建物本体工事以外の擁壁工事や配管工事に伴う工事工事の確認調査が有り、遺構に影響及び工事立会部分の一部については発掘調査対象としている。工事工事による確認調査部は、上記確認のみで、地上に遺構を保存している範囲がある。
 3. 遺構の呼称は記号化し、構造遺構をS1、整地遺構（堅式住居）をSC、掘立柱建物をSB、土坑をSK、柱穴などピット状遺構をSP、その他の遺構（不明遺構、専用遺構、近傍以降の櫛縫）をSXとした。
 4. 本書の発掘図に用いた方位北極、特に断るがないものは南北（本文中も真北とした）。磁北は西偏約6°^{20'}として、図面によっては直角を求める。調査区付近の国土地点標記が明確であったため、調査区周辺を測量して福岡市道路局地図に調査区を入れている。また調査区内の標高は、道路局地図のレベルから移動して用いている。
 5. 本書に用いる遺構図の作成は、主に調査担当の久住益雄（福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課）および、中尾祐一、鶴良秀幸（当時・西南学院大学人文学部）、樋木謙義（埋蔵文化財調査課）が行い、一部を常松幹雄（埋蔵文化財調査課）、吉留義秀（放人）、菅波晋一（当時・埋蔵文化財調査課）が行った。遺構の実測は、土塁を朝岡和也（福岡大学人文学部）、久住が行ったほか、築原さや子（福岡大学）の協力を得た。石器の実測は上田一郎男（埋蔵文化財センター）、朝岡が行った。鉄器は久住が実測した。製図は、久住、朝岡、上方弘高（埋蔵文化財調査課臨時職員）、松下伊都子（整理作業員）が行った。本書に用いる遺構写真および遺物写真は、全て久住が撮影した。
 6. 本書の執筆と算定久住が行った。
 7. 本書に記載する出土遺物と記録類（図版、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

本文目次

I.はじめに	1
II. 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 検出遭難	8
3. 出入通物	28
図版(PL.)	29

報告書抄録

ふりがな 書名	ささばる3—ささばるいせきだい4じはつくつちょうさほうく一 箇原3
副書名	—箇原遭跡4次発掘調査報告—
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1224
編著者名	久住益雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦2014年3月24日

遺跡名	さざばいせきだい4じちょうさ
遺跡名	笠原遺跡第4次調査
所在地	ふくおかはたたくもろおか5ちょうめ69ばんちない
遺跡所 在地	福岡市博多区諱岡五丁目69番地内
市町村コード	40130
遺跡番号	0103
北 緯	33度33分19秒（世界測地系）
東 経	130度27分5秒（世界測地系）
調査期間	2012.10.15～2012.11.21
調査面積 (m ²)	181.52m ² (住宅建設分本調査範囲+工事立会後本調査範囲) 工事立会による上面確認調査範囲を含めば223.70m ²

調査基本情報一覧表

遺 踪 名	榎原跡遺	調 査 次 数	4 次	調 査 略 号	SSB-4
調 査 番 号	1225	分 布 地 图 図 版 名	25.井尻	遺 落 登 錄 番 号	020103
事前審査番号	24-2-466	調 査 原 因	共同住宅建設	敷 地 面 積	703m ² (地番全面積)
調 査 期 間	平成24年(2012年)10月15日～同年11月21日	工 事 面 積	140.75m ² (住宅建設範囲)		
調 査 地	福岡市博多区諸岡五丁目69番地	調 査 面 積	181.52m ² (住居建築面積+立候後測定調査範囲)		

笹原 3

—笛原遺跡第4次発掘調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1224集

2014年3月24日

発行 福岡市教育委員会

印 刷 魚住印刷
福岡市博多区大博町8-20

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、博多区諸岡五丁目69番地内における共同住宅建設工事に伴う、文化財保護法第93条に基づく埋蔵文化財の有無についての照会を平成24年（2012年）8月17日付で受理した（事前審査番号24-2-466）。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である笠原遺跡（分布地図番号25-0103）の範囲内であり、当該地はすでに平成10年7月9日に試掘調査が実施されており（事前審査番号10-2-118）、地表下32～38cmで遺構（埋蔵文化財）が存在することが確認されていた。埋蔵文化財審査課事前審査係は、今回の照会時に申請された工事内容の場合には、埋蔵文化財に影響することが確実と判断し、その保全等について申請者と協議を行った。

その結果、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないとの結論に至り、共同住宅建設工事対象部分についての記録保存のための発掘調査を実施することで申請者の合意を得た。そして、平成24年10月12日付で、個人事業者を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。発掘調査は福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課がこれを行うこととなり、同年10月15日から発掘調査を行い、翌平成25年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

発掘調査は平成24年10月15日に着手した。発掘調査終盤には、当初設定した発掘調査範囲（共同住宅建設工事範囲）以外にも、擁壁工事および配管工事等の付帯工事が地表下の埋蔵文化財に影響する可能性が懸念されたため、委託者と協議の上、工事立会に伴う遺構確認調査を併行して実施し、予定工事が遺構に影響する範囲については発掘調査を追加して実施した。発掘調査は平成24年11月21日に終了した。

2. 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：平成24年度、資料整理・報告書作成：平成25年度）

調査総括：文化財部埋蔵文化財調査課

課長 宮井善朗

同課調査第1係長 常松幹雄

庶務：埋蔵文化財審査課

管理係長 和田安之

管理係 川村啓子

事前審査：埋蔵文化財審査課

事前審査係長 加藤良彦

同課主任文化財主事 佐藤一郎

同課事前審査係文化財主事 森本幹彦

調査担当：埋蔵文化財調査課

同課調査第1係文化財主事 久住猛雄

なお文化財部は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

笠原遺跡は、福岡平野の中央部、那珂川と御笠川・諸岡川に挟まれた段丘上および諸岡川左岸の沖積微高地または谷底平野に立地する遺跡である。調査地点は遺跡推定範囲の北部に位置し、阿蘇4火砕流起源の八女粘土・鳥栖ローム層が覆う段丘の低位面である。福岡平野南部の春日丘陵上にある白水大池に源を発し、北西に流れ御笠川に合流する諸岡川は、牛頭山麓から延びる段丘を開析し、河道の周辺に谷底平野を形成している。笠原遺跡の範囲のうち、中央から南・西側の大半はこの谷底平野

とその間にある沖積微高地に立地し、元は笹の生い茂る原野である。記録では新田開発されたのが寛永九年（1639年）であり、低湿地であったためか水田開発が遅れた可能性がある。笹原遺跡1次（福岡市埋蔵文化財調査報告書第359集）および3次調査地点（同第662集）はこの範囲である。3次調査地点では、蛇行する諸岡川の旧河道が検出された。一方、遺跡北部にある2次および本報告の4次調査地点は低位段丘にあり、むしろこの範囲は、北西側の諸岡B遺跡が立地する諸岡丘陵に続く立地である。2次調査（第642集）の結果、笹原遺跡はそれまでの想定よりも北にやや広がることになり、北側にある諸岡B遺跡との間は狭まった。以下、主に弥生時代から古代に焦点をあてて周囲の遺跡を概観する。

諸岡B遺跡の丘陵部には古墳群があり、北側に径20m以上の2号墳が現存し（斜面を背にする立地で、7世紀代と考えられ、時期的には大型円墳）、また神社で削平されているが、後円部の一部と埴輪部がわずかに残る3号墳がある（東側裾部ラインから全長25m前後の前方後円墳の可能性あり）。この南側に4号墳の残穴がある。2号墳は周囲で埴輪が出土・採集され、5世紀末～6世紀初頭（TK47～MT15期）であろう。この丘陵には、かつて忠魂社があった丘陵中央部から、頂部西南側斜面に連なる壺棺墓群と（B群）、やや下った西側斜面から南側に延びる壺棺墓群（A群）がある。B群には、かつて丘陵中央の忠魂社造営時に細型銅剣と貝輪が出土したといい、3号墳西側の3次調査でもゴホウラ製貝輪8個が出土した壺棺がある。一方、A群でもゴホウラ製貝輪1点が出土している。丘陵部北東裾部の5次調査では、弥生時代前期末（板付II c式）に伴う円形粘土帶期の朝鮮半島系無文土器が多数出土しており、渡来人



Fig.1 笹原遺跡の位置と周囲の遺跡（1/8,000）

の存在が推測されているが、当時の拠点集落であった板付遺跡の縁辺部であることも注意される。

笠原遺跡に戻ると、2次調査では古墳時代初頭から前期前半を主とし、中期前葉を下限とする竪穴住居群が検出されている。4次調査の環溝出土土器群や竪穴住居群の時期幅とはほぼ一致しており、遺跡北部には同時期の集落が広がっているものと推定される。遺構は不明だが、弥生時代前期と推定される石器もある。1次調査では、多くは時期不詳のピット・土坑群が検出されている。その中で遺物出土した土坑は、7世紀後葉～8世紀初頭の須恵器・土師器を伴い、土塚墓の可能性がある。笠原遺

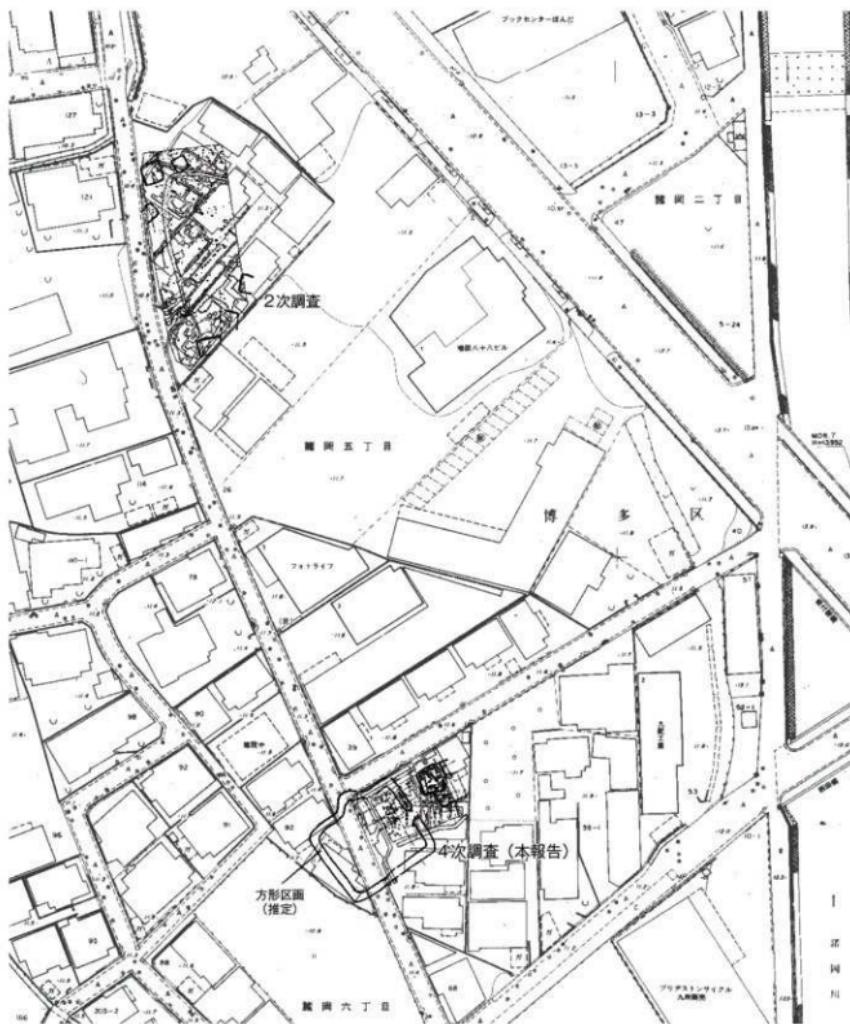


Fig.2 笠原遺跡4次調査地点位置図 (1/1,000)

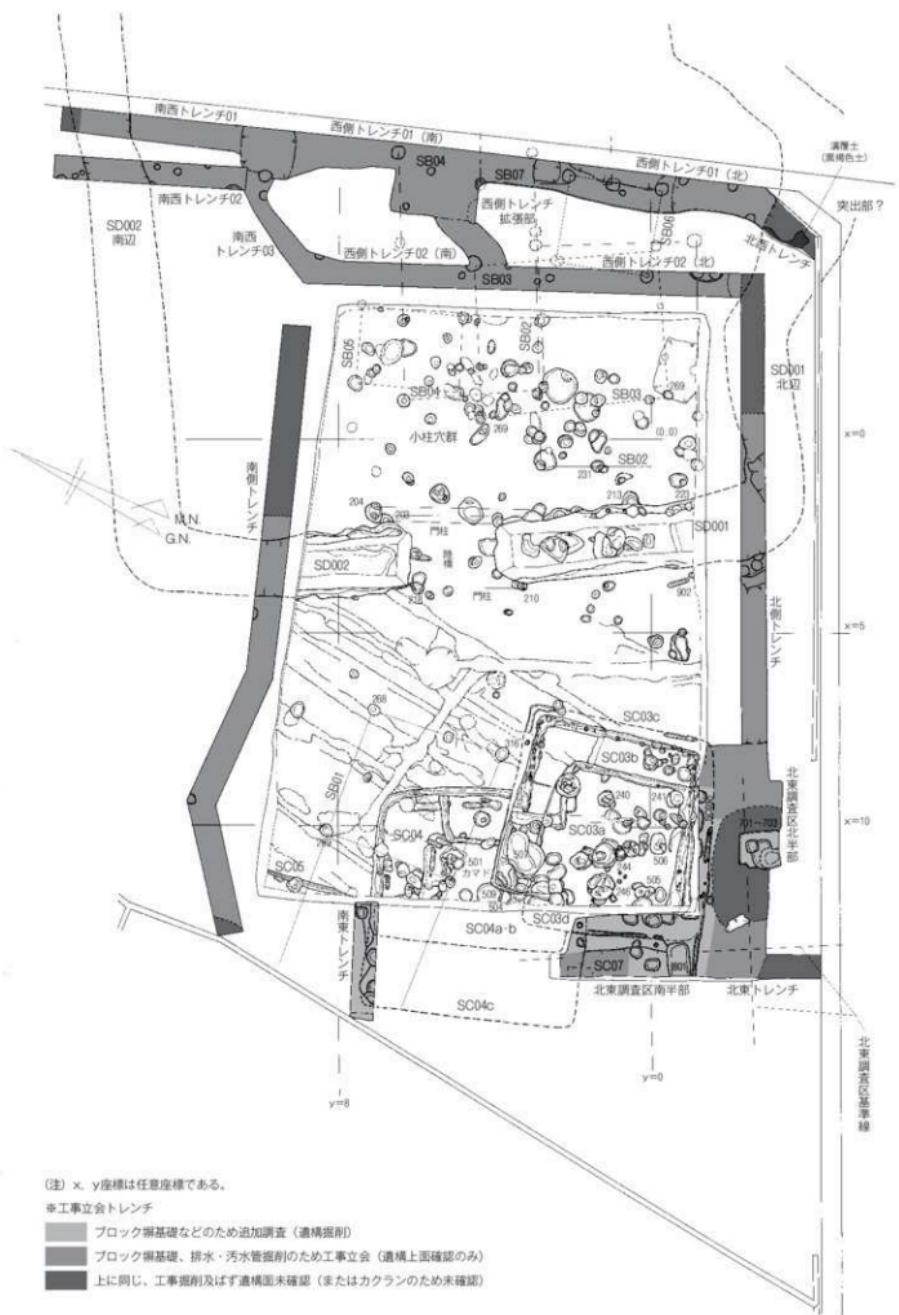


Fig.3 調査区全体図 (1/125)

跡では同時期の集落遺構は未検出だが、谷部を挟んだ西側の井尻B遺跡には、7世紀第4四半期から8世紀初頭を前後する時に、基壇盛土がある推定寺院跡（「井尻廢寺」）、官衙域、倉庫域、集落域が、正方位を指向する条溝や道路遺構を伴い、計画的に配置されたような拠点的な集落であることが判明している（第923集、井尻B22次報告参照）。笠原1次の沖積微高地から低湿地に営まれた土坑群は、飛鳥時代末期前後の井尻B遺跡に関わる土壙墓群の可能性が考えられる。

笠原遺跡と井尻B遺跡の関係性は、本報告4次地点における古墳時代前期「方形環溝」の経営主体の墳墓位置の候補という点でも注目される。井尻B遺跡は、弥生時代早・前期に散発的に遺物があるが、その本格的な遺構の展開は、段丘上で井戸の掘削や堅穴住居群の展開が始まる中期前葉（須玖I式期）以降である。中期前葉から後期前葉までは遺跡の主に北半部に集落・墳墓遺構が分布するが（後期に断絶時期は無い）、南半部にも一定の分布がある。南半部は後期前葉までの集落遺構の分布域が限られるが、下記のように墓域もあり、集落としても後期以降に継続している。後期中葉以降、古墳時代初頭までは遺跡範囲の多くに遺構が広がり、拠点的な大集落として南北が一体化する。しかし古墳時代前期前葉にやや遺構数が減少し、前期後半以降は集落が消滅する。弥生時代中期の壺棺を主体とする墓域は、北半部では17次E区・16次から27次（第1136集）にかけて広がり、27次地点では、後期には多くにベンガラを伴う土壙墓群に移行する（推定後期後半以降の建物に切られる）。南半部の北端では、21次（第788集）付近に壺棺墓群があり、後期の土壙墓？（21次SD002、SK009？）や終末期の土壙墓もある。南半部南端の34次（第1106集）では、中期後半～後期初頭の壺棺墓群・土壙墓（SR11?）の展開後、古墳時代初頭には土壙墓・木棺墓・石蓋土壙墓からなる墳墓域となる（後期の土坑SK02・10・13も土壙墓の可能性あり）。同時期に方形周溝（SD07・08・09）があるが、墳墓域に築造され、周溝覆土内埋葬（SR12、SR06）や周溝と直交して重複（SR05）、周溝方位と並行（SR17）して墳墓が築かれるから、方形周溝も中央の主体部が削平された周溝墓（一辺15m前後の方墳）とするのが妥当だろう（溝出土土器からⅠ期ないしⅡA期の築造か）。北半部の10次地點（第678集）で検出された幅広のL字状溝は、古墳時代前期前葉（ⅡC期）の大型方形周溝墓（一辺20m前後か？）の隅角部であろう。3次地點（第411集）には土壙墓・石蓋土壙墓群があるが、上限が後期後葉とみられる。水銀朱とベンガラが伴う墳墓群は、類例から後期後葉から古墳時代初頭の特定集団墓であろう。ベンガラのみの石蓋土壙墓2基は、この地點では古墳前期に下る可能性が高い。さらに方形周溝（一辺8m）で埋まれた16号土壙墓（ベンガラ撒布）は、本来は石棺墓ないし小石室の可能性があり、古墳前期後半頃であろう。3次では他に周溝墓の可能性がある弧状溝（SD01）があり、周間に古墳前期の周溝墓群が展開している可能性がある。この延長として、古墳中期中葉に埴輪と初期・古式須恵器（TK216～TK208併行）を伴う井尻B1号墳（径25m）が築かれるのだろう。井尻Bに展開する古墳時代初頭から前期の墳墓は、笠原4次の方形環溝との関係を考慮する必要がある。井尻Bの集落がやや衰退する前期前葉（ⅡB期～ⅡC期）にやや先行するが、笠原遺跡北部の集落は古墳初頭（ⅡA期）からその形成が始まり、井尻Bから漸移的に分かれてきた集団の可能性が考えられるからである。

（註）古墳時代前期の編年は、久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」「庄内式土器研究」XIX、による。

II. 調査の記録

1. 調査の概要

調査地點は笠原遺跡の北部にあり、段丘低位面にある。現在の敷地標高は11.5～11.8mである。近現代の盛土を除去した地表下20～40cmの浅いレベルで鳥栖ローム層上面となり遺構を検出した。調査

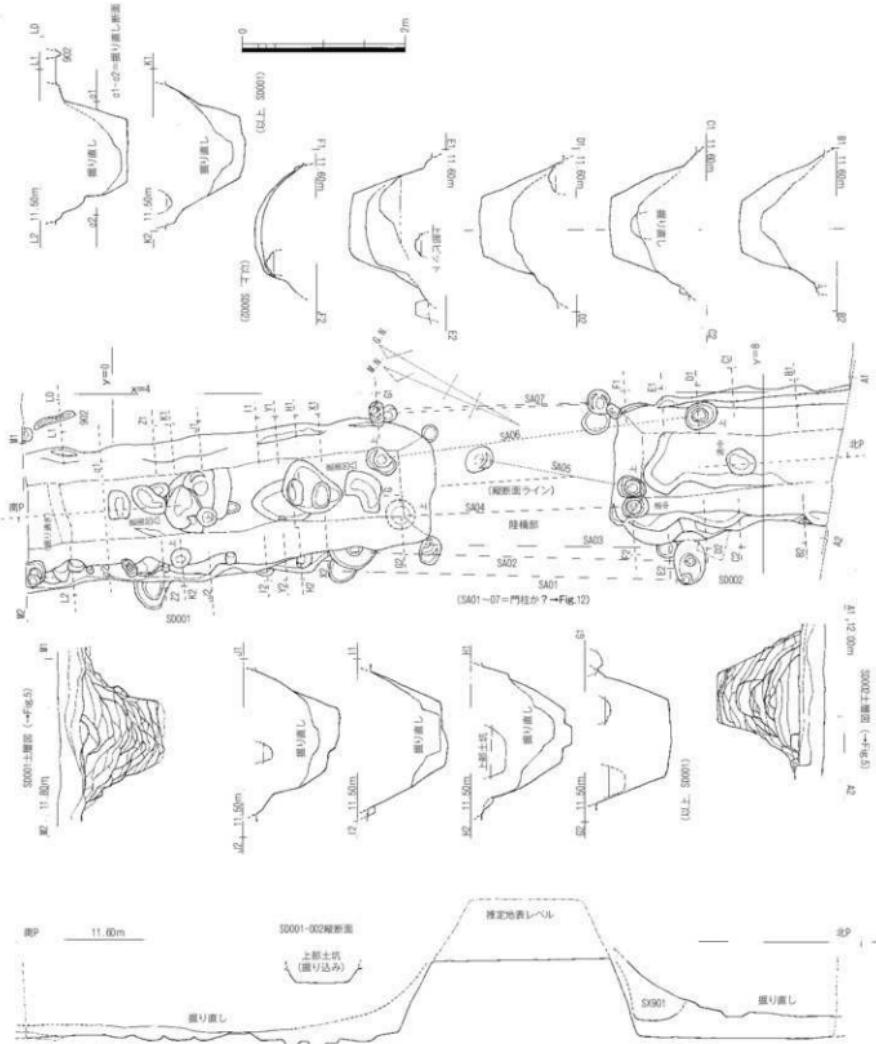


Fig.4 SD001 (左)・SD002 (右) 実測図 (1/60)

では廃土置場が敷地内に十分確保できたので、調査区を反転していない。遺構の覆土は、黒褐色から暗褐色土が主体である。遺構の大半は古墳時代前期～中期前半と考えられる。淡い褐色土のピットもあるが、これは近世に下ると考えられる。

検出遺構は、溝2条（方形環溝になると推定）、竪穴住居4棟以上（うち2棟部分で建替痕跡あり）、土坑5基、ピット（柱穴ほか）多数である。遺構は、調査区中央を略南北（GN-32°～34°W前後）に走る溝状遺構を境に東西で分布様相が違い、西側は小規模なピット群、東側は竪穴住居群となる。溝

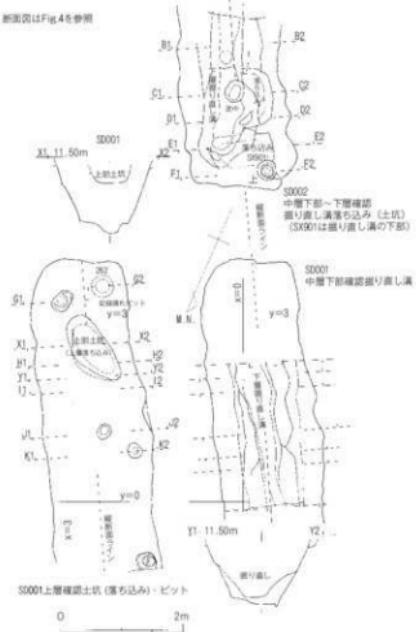
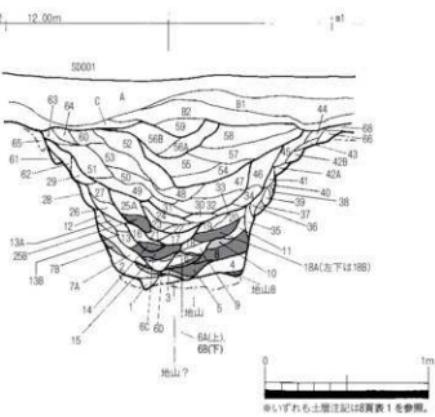


Fig.6 SD002・SD001掘削途中確認遺構実測図 (1/80)

SD001とSD002の掘削時期は、最下層に近い土器群から前期前葉（ⅡB期）以前に遡るが、溝は埋没しなが

Fig.5 SD001北壁(上)・SD002南壁(下) 土層断面図(1/30)

らも何度も掘り直しを行い、長期間機能したことが分かる。溝は方形区画環溝となり、北西側の工事立会部分の観察から方形環溝の北辺中央に「突出部」がある可能性が高い。溝の東側は、堅穴住居群までの間が遺構が希薄な帯状空間となる。堅穴住居群は、SC003、SC004、SC005と、工事立会追加調査で確認したSC007がある。SC004はSC003に切られ、またSC006はその両者に切られている。最も古いSC006は、北側壁際の屋内土坑から多量の土器が出土し、前期初頭（ⅡA期）である。SC003・004・006はいずれも貼床によるベッドを付設する。SC004には、ベッド南東隅角内側にカマドを検出したが、下部に古相の柱穴があり、建替え後らしい。またSC003の床面には、炉の可能性がある焼土ないし炭粒が集中する凹みや浅い土坑が6箇所も検出されたが、建替え（3回以上）に対応するものか、機能が異なる施設かは不詳である。堅穴住居群は密集し、調査区東側に続くとみられる。

出土遺物は、パンケース9箱分で、古墳時代前期から中期前半の土師器が大部分である。溝出土土器が多く接合し、箱数で示すより遺物が多い印象である。他に、弥生時代中期～後期の弥生土器、黒曜石剥片石器、古墳時代前期～中期前半の鉄製品（鉄鎌など）数点、中世土師器片や近世陶磁器片が僅かにある。また竪穴住居から赤色顔料（ベンガラ？）を含む可能性がある土を検出している。弥生土器や黒曜石剥片石器は、古墳時代遺構に混入し、その時期の遺構はみられないが、北側の諸岡B遺跡には弥生時代前・中期の遺構群があり、本遺跡にも当該期の遺構が多少分布していたのであろう。

SD001 北壁土層注記 (Fig. 5)

SD002 單體主圖 (Fig. 5)

表1. SD001北壁, SD002南壁 (Fig. 5) 土層注記一覧

2. 檢出遺構

(1) 溝状遺構 (SD) と付隨遺構

· SD001、SD002（推定方形区画溝）(Fig.4)

SD001およびSD002は、同一線上（N-34.5°前後－W、以下文中のNは真北とする）の溝状遺構であり、両溝の幅、断面形、深さ、出土遺物の時期が酷似し、その間には陸橋があるものの同時期の一連の溝と推定できる。調査終盤の建築付帯工事に伴う工事立会調査において、SD001は北側で西に屈曲する事を確認し（Fig.11左下、PL.8-7）、またSD002は本調査区のすぐ南側で延長を確認した（Fig.11左上、PL.8-8）。さらに南ではSD001北側と対称的に屈曲すると予想され、これを裏付ける東西方向の溝を確認したので（Fig.11右上「南西トレチ01・02」、PL.8-5・6）、**方形区画溝（方形環溝）**である蓋然性が高くなった（Fig.3）。一方、西へ屈曲したSD001は、延長があるはずの工事立会西側ト

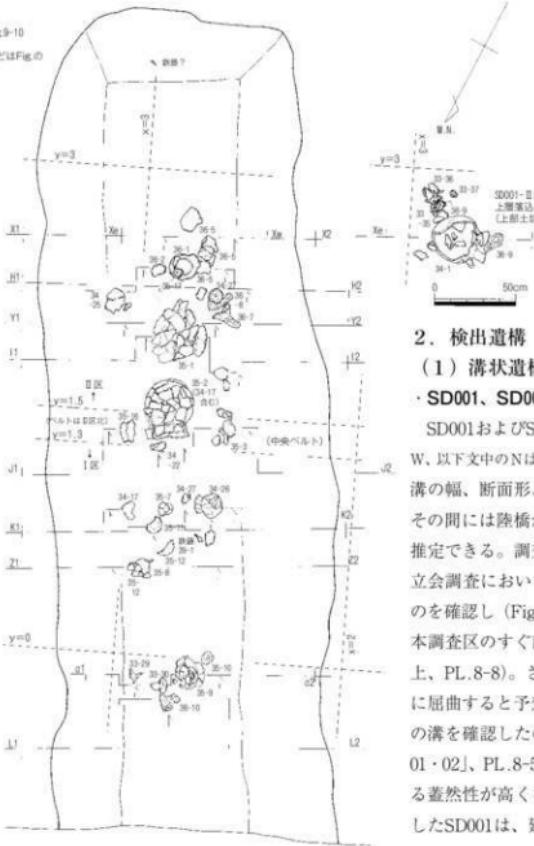


Fig.7 SD001遺物出土状況平面図 (1/30)

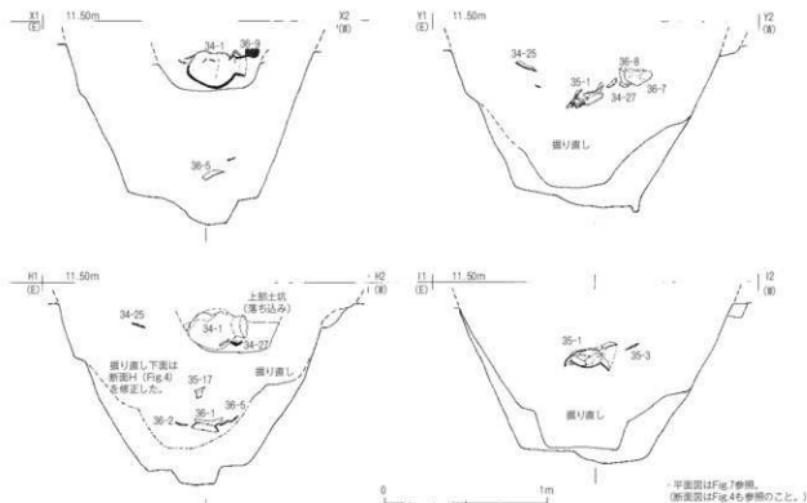


Fig. 8 SD001遺物出土状況断面図① (1/30)

レンチ01・02北端で検出されず、その代わりに敷地北西隅のトレンチで黒褐色土の落込みが確認されたので、これがSD001の延長と判断した (Fig.11右下、PL.8-9)。溝の曲がり方から、古墳時代「首長居館」などの方形環溝に付設することがある「突出部」の存在が推定できる。この部分は造構の上面確認のみであり不確実であるが、「突出部」ならば、SD001の内法から突出部の推定外線上端までが約4.5mとなる（以下全て検出レベルが同じ場合の推定値）。またSD001北辺とSD002の推定南辺の距離は、約17.6m、溝の芯々が約16.3mとなる。「突出部」を方形区画の中軸とするとき東西は溝の芯々で約20.0m、溝の外線上端で約21.5mとなる。ただし、方形区画の可能性は高いが西半分は未調査であり、「突出部」の推定を含めて今後周囲で調査が行われた場合の検証課題である。なお、SD002・001の北側延長方向は諸岡丘陵頂部を向くことが興味深い事実として指摘できる (Fig.1、裏表紙写真左上)。

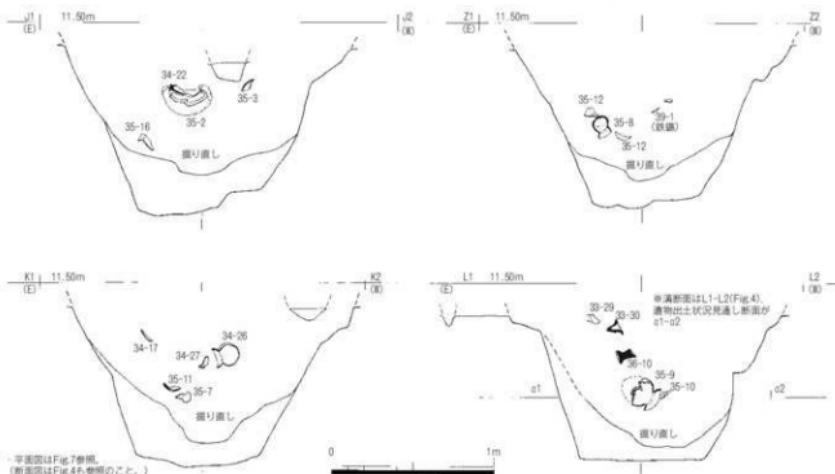


Fig. 9 SD001遺物出土状況断面図② (1/30)

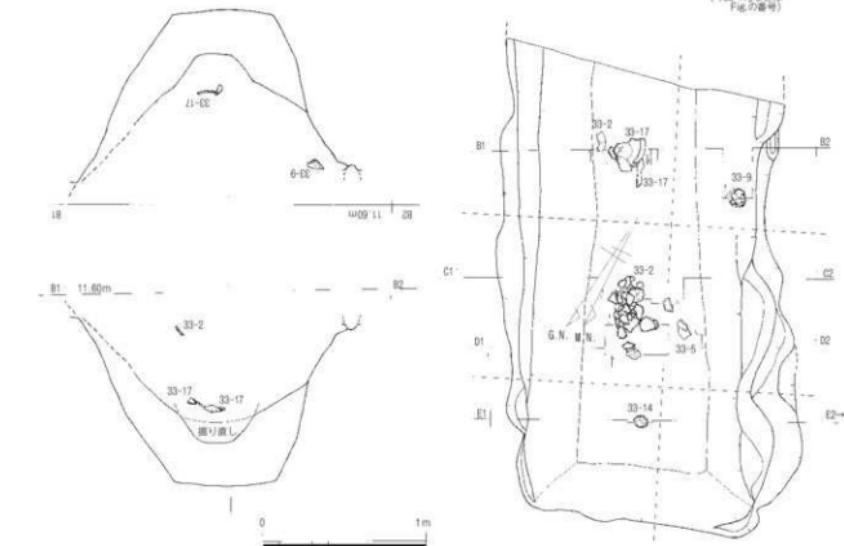
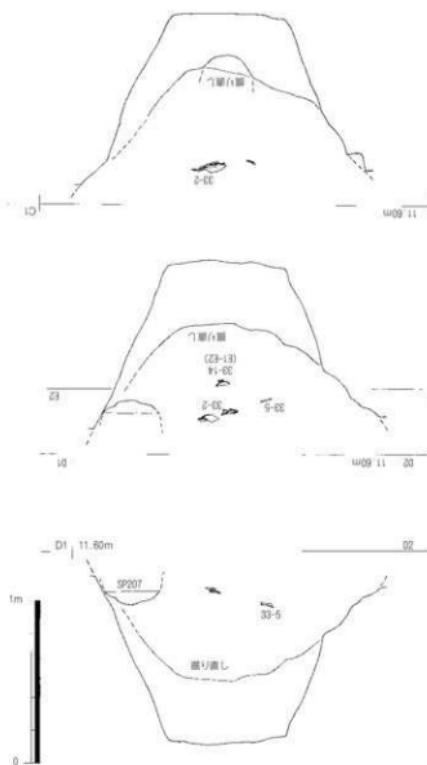


Fig.10 SD002遺物出土状況平面図(上)・断面図(左)(1/30)



SD001もSD002も、完掘した本調査範囲では全て断面逆台形であるが(Fig.4)、中位より上部がやや開き気味である。SD001・002とともに、上面幅は155~180cm前後、深さは100~105cmで一定しており、底面レベルも陸橋に近い箇所とそこから離れた箇所との間に有意な差がない。ただしSD002の底面がおよそ平坦である(PL.4-5)のに対しSD001の底面には凹凸がある(PL.3-6・7)。また底面はいずれもトスローム下部に達し、雨が降った後などは湧水があったと思われるが(調査中もそうだった)、常時湧水する深さではない。調査区東側の竪穴住居の遺存度を勘案すると、遺構上面は約70~80cm削平されていると推定される(竪穴住居の深さが本来90~100cmとした場合)。その場合、溝の本来の幅は2.6~2.8m前後となる。またSD001-SD002間の陸橋部は、現状220cm幅だが、本来は130cm前後という狭い出入口だったと推定できる(Fig.4下)。

溝の覆土はSD001・002とともに主として黒褐色～暗褐色で、中層以下は層により地山ローマブロックの多い層がある(Fig.5、表1)、

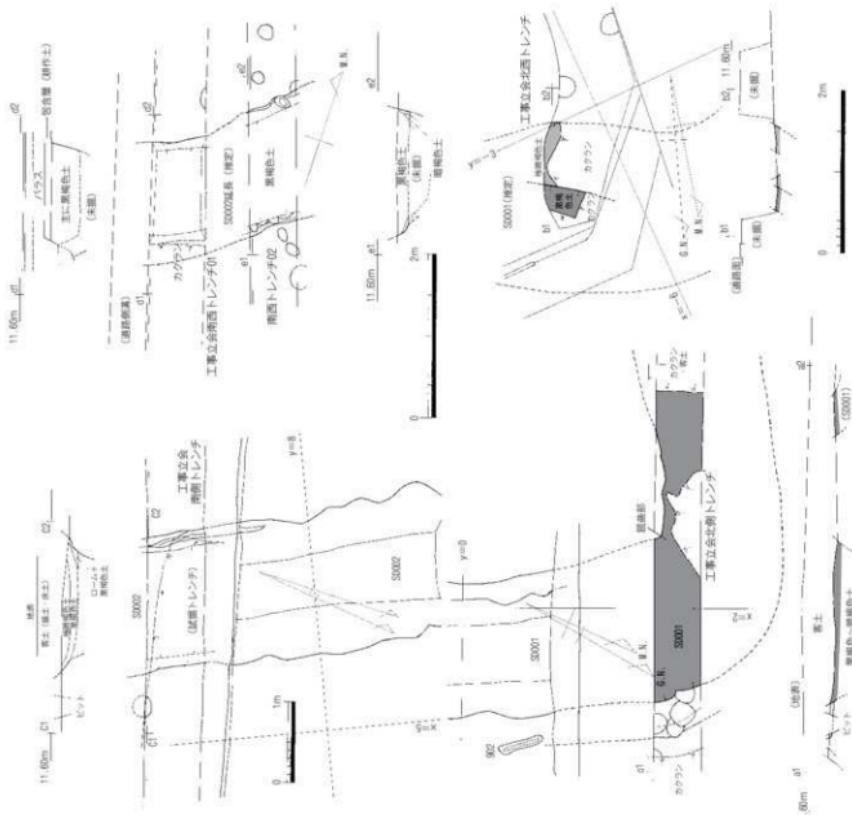


Fig.11 工事立会調査区確認SD002(上)・SD001(下)実測図(1/60)

SD002はPL.4-6・裏表紙左最下段、SD001はPL.4-1・裏表紙左下二段目)。下層では、一時的に瀬水があったのか有機物(炭化物など)を含む黒褐色泥質シルトの層がある。地山ブロックを含む層の堆積は区画の内外(西東)どちらにも偏ることがないので、一方に土壌などの盛土があったことは推定できない。調査では、SD002は南側、SD001では北側にそれぞれ幅50cmのトレーナーを下部まで先行して掘削し、土層断面から堆積状況や途中の再掘削状況を把握して、残りの部分の掘削・精査を行った。土層を検討すると、左右相互のレンズ状堆積を切る不整合なラインがいくつも認められたので、埋没進行途中で何度も掘り直しされた状況が看取できる(Fig.5)。最も下層の掘り直し層は平面的にも把握し記録した(Fig.6、SD001はPL.3-3、SD002はPL.4-3)。その下部掘り直し層は、SD002では深さ70~80cm、SD001では80~90cmと差がある。またSD001-II区上層では土坑状の落込みを確認した(PL.2-1)。土層断面を見ると、SD001では平面で把握できなかった上層での土坑状落込みが他にもあったらしい(Fig.5上-56層)。ただしSD002では確認できなかった。SD001・SD002とともに陸橋部側の立ち上がり隅角が鋭角に遺存し、さらにSD001では壁面下部では掘削時の鋸痕跡を確認した(PL.3-7)。

SD001-002とともに、古式土師器がまとめて出土した（遺物出土状況はFig.7~10、PL.1-3・4、2-1~6、PL.3-1~6、PL.4-2、裏表紙右下）。いずれも、層位や廃棄単位での出土状態を詳細に記録したので（Fig.7~10）、土器廃棄という祭祀行為の把握や土器編年の研究に寄与する資料になった。

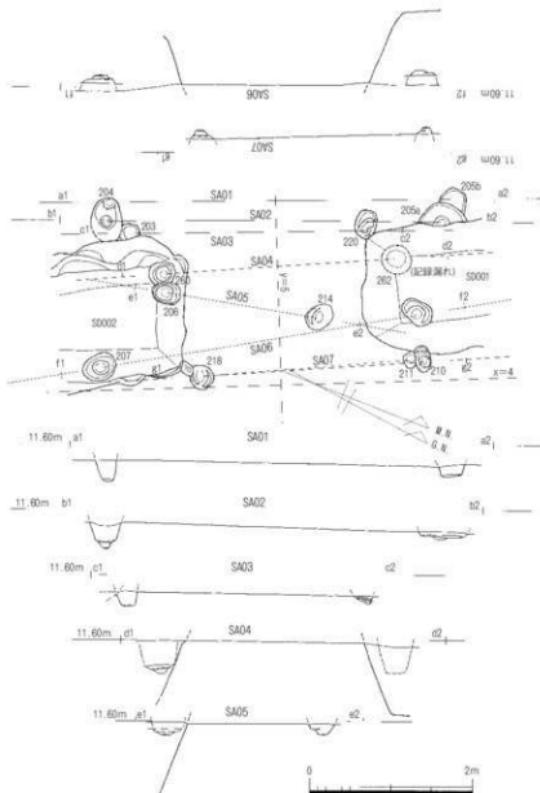


Fig. 12 SD002-SD001間門柱状遺構実測図 (1/60)

の存在などから、祭祀的行為に伴う土器廃棄の可能性がある。**SD002**では、上層中央で壺33-2が出土したが(PL.4-2)、33-5の廃棄と一連ならば、傾きから外側からの廃棄となる。33-2の口縁部はやや離れた南側で外側から廃棄されている。同じく上層33-9は西側(内側)からの廃棄である。下層上部33-17は、下部掘り直し溝下層出土だが(PL.4-3後方)、外側からの廃棄だろう。その他SD002では、最下層で底面からやや浮いて炭化した木材の残骸が出土した(PL.4-5)。

溝の掘削時期は、上記SD001⑤の下部掘り直し溝最下層土器群(Fig.8左下)がⅡB期であるから、それ以前であり、出土遺物の中にⅡA期の土器があり、それが掘削時期であろう。また**溝の存続時期**は、上層土器から少なくとも古墳時代中期初頭までは区画溝として機能していたとみられる。

・方形区画に付随する遺構

以上のSD001・SD002からなる推定方形区画溝に付随する遺構として、まず**掘立柱建物(SB)**があるが、これは後述する。以下では、陸橋部に推定した**門柱状遺構**を報告する(Fig.12)。門柱状遺構はいざれも、陸橋部の南北にある2本の柱穴から想定したもので、SA01~07の7組を想定した。これらのうち、SA01~03は溝に切られることになるが、SD001・002とともに数度の大がかりな再掘削が想定され、問題ないだろう。また柱穴の切り合い関係からSA03→SA01→SA02→溝再掘削という順序が想定される。対してSA04~07は柱穴が溝を切る、ないし柱穴を覆土途中で検出したものである

SD001では、①Ⅱ区上層(一度埋没した後の掘り込み)=**上部土坑**、Fig.7右上33-35・36・37、34-1、36-9、遺物番号はFig.33以下に対応、PL.1-3・4、PL.2-1)、②Ⅱ区北~I区南中層上部~中位(Fig.7中35-1~3、36-7、34-26・27、鉄鏃39-1、北側36-10支脚、PL.2-4・6)、③I区中層下部~下層上部(同35-7・8・11・12・16、北側35-9・10、PL.2-5)、④Ⅱ区下層(同36-1・2・5、PL.3-4手前・3-5左・3-6奥)で各一括廃棄土器群が把握できた。他に、⑤I区北側上層(同33-29・30、PL.2-2手前)の単位がある。①の廃棄方向はどちらとも言えないが中央より西側に寄っていることが注意される。②は西側(区画内側)から、③は東側(区画外側)から、④はどちらかといえば西側から、⑤は東側から廃棄された可能性が高い。土器群の様式が下層から上層へ新しくなっている。土器の中には、ヘラ描記号や打欠き穿孔の存在、支脚の出土、外來系搬入品

(SP260はPL.4-2)。このうちSA04のSD001側のSP262は調査時のミスのため、写真や図面の記録が漏れている。しかし、SD002側のSP260に對向する位置の同様の掘削レベルで検出したことを明記しておく。またSA05として想定したものは、溝方位からずれている。SA04のSP260をSA05のSP206が切るのと、最終段階の門柱状遺構と想定する。このSA05(N-18°-W)に近い方位の遺構として、区画内のSB06、区画外側(東側)のSC03a~c、SC05がある。

· SD902 (Fig. 11左下)

SD001の北側の東に並行する様に検出した幅10cm程



Fig.13 SC003平面図 (1/60)

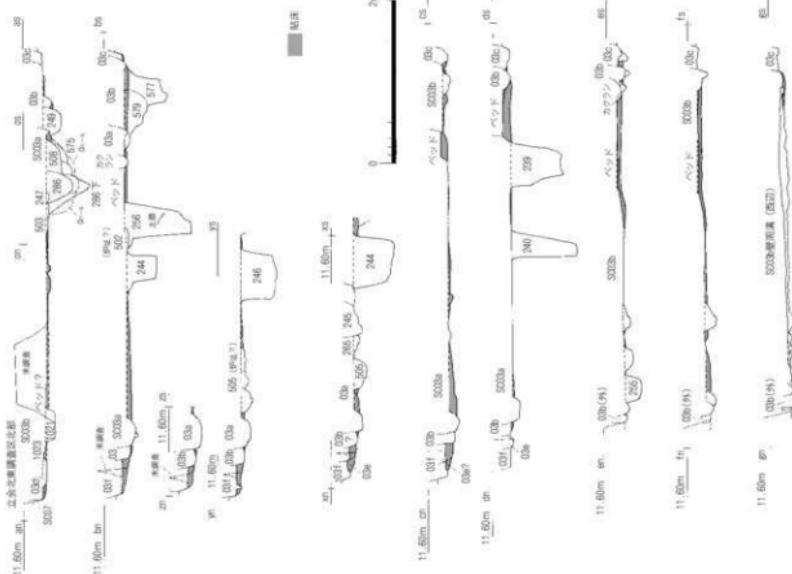


Fig.14 SC003断面図 (N-S) (1/60) ※Fig.13参照

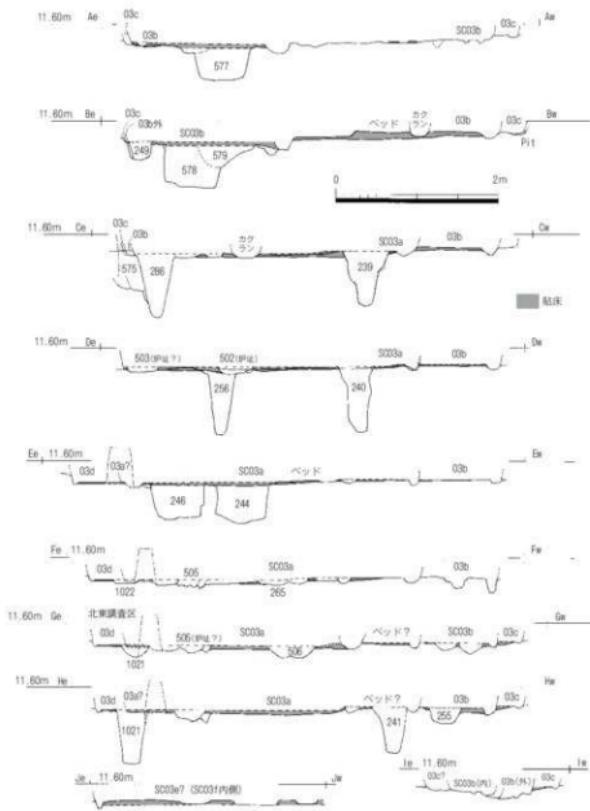


Fig. 15 SC003断面図 (E-W) (1/60) ※Fig. 13参照

→SC003となる。重複関係は、SC005は分からぬが、位置関係的には一時期一棟であろう。SC004とSC003は多くの建替があり、住居群出土土器の時期幅（ⅡA期～ⅢA期）から、一棟の実質的存続期間はきわめて短期間と推定される。西側の方形環溝の「祭祀場」との推定にも関係するだろう。

・SC003 (Fig. 13~15, PL. 5-2・3, 裏表紙右中段)

正方形に近い堅穴住居のプラン変更（建替）の累積である。SC004を切る。SC003d（工事立会北東調査区で検出）→003c→003b→003aの順序である。003dと、壁周溝痕跡から「003b古（=003e）」としたものは同一の可能性がある。およそ、平面プランが大から小へ変遷している。003aは003bをベッドとする同一住居の土間部の可能性も考えたが、北側で壁周溝の切合があり、別住居と認定した。003bは南西部にベッドを有するが（貼床で構築）、その北東隅がより新しい003a内に残ったような検出状況であり、柵状施設として003a内に一部残ったとみられる。北東調査区で検出した「003c」北辺は、本調査区側のSC003cと同一の可能性もあるが、北辺と南辺が平行せず、西辺が崩わないため別住居の可能性がある（003fとする）。その場合、003d（=003e?）→003f→003cとなる。なお深さは遺存が良好な箇所でも20cm前後しかない。多くは10cm前後ないしそれ以下である。

度の小溝。深さは10cmに満たず、南北で自然に浅くなり消える。SD001の北側延長を確認した工事立会北側トレンチでは、この溝の延長線上に対応するようにSD001上部が東側に浅く拡張し、ピットがある（Fig. 11左下）。区画溝が機能したある時点での、柵状施設の下部構造としての布掘溝の可能性がある。

（2）堅穴住居（堅穴建物）(SC) と付随遺構

本調査区東側でSC003・004（PL. 5-1）およびSC005を検出し、工事立会北東調査区でSC007とSC003の北辺・東辺、SC004の南東部と北東部を検出した。いずれも方形プランであり、時期はいずれも古墳時代前期とみられる。重複が激しかったが、ほぼ同一箇所でプランが変更されたものは一つの遺構番号を付し、プラン変更（建替）は支番号を付した（SC003a、SC003bなど）。重複関係は、SC007→SC004

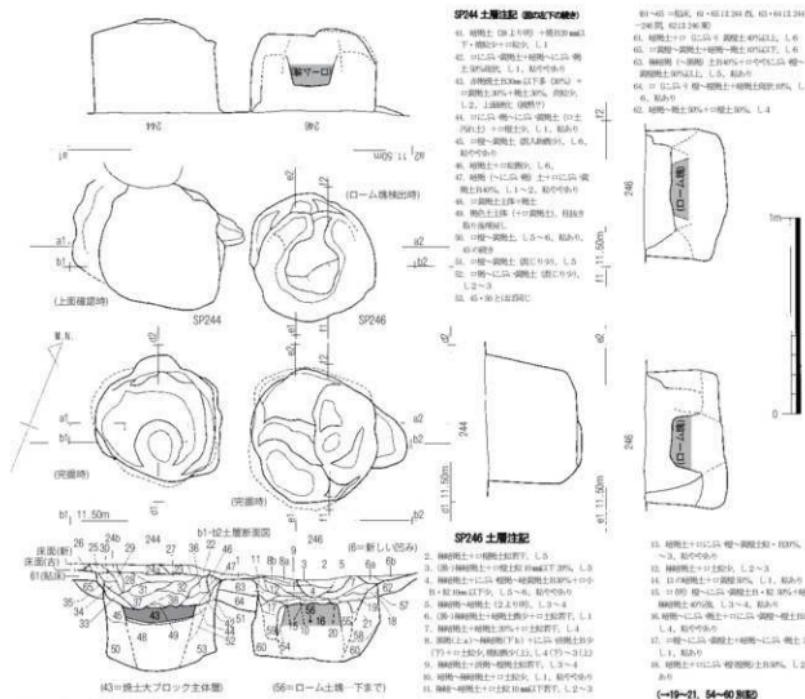
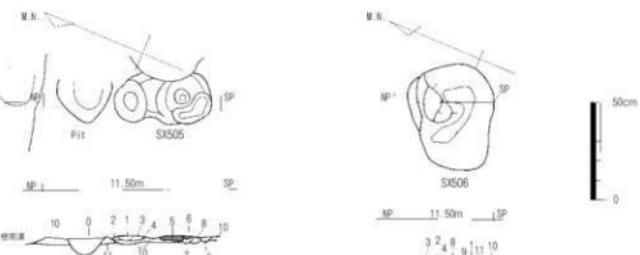


Fig.16 SP246・244実測図
土層断面図 (1/25)

SP244 (Fig. 16左) 土層注記

表2. SP244十層注記(Fig. 16)



附录 B

SY506 相机卡口适配器

Fig.17 SC003床面SX505・506炉址平面図・土層断面図 (1/25)

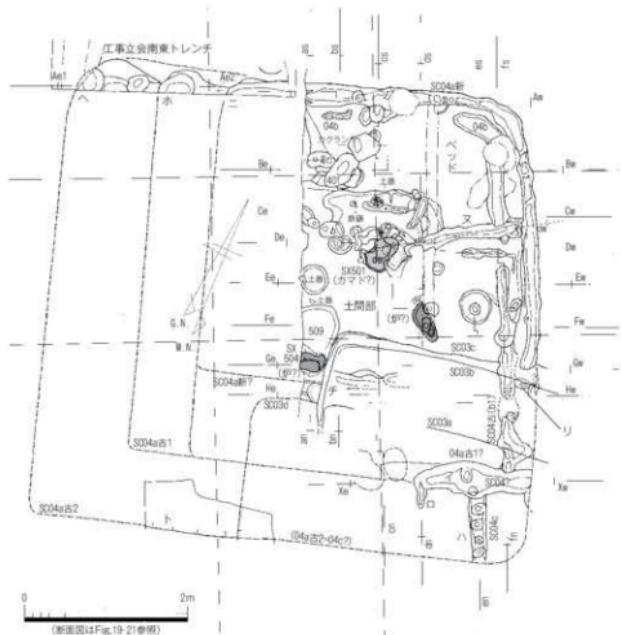


Fig.18 SC004平面図 (1/60)

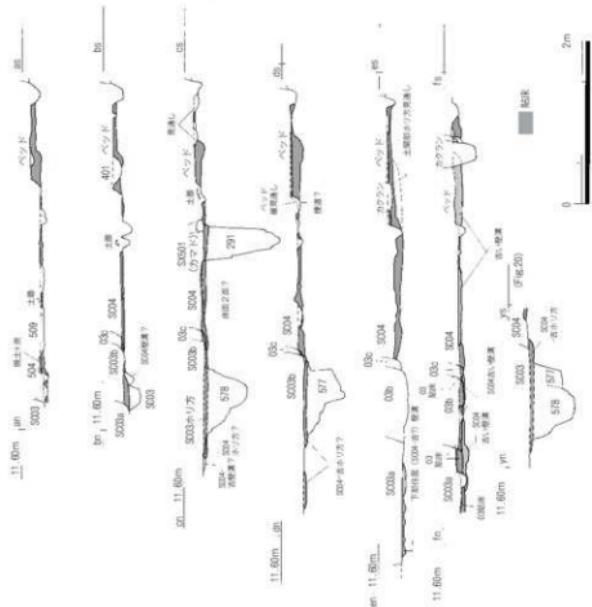


Fig.19 SC004断面図 (N-S) (1/60) 参照Fig18・20

SP246 (Fig. 16 右) 土層注記特徵

88. 仁に「萬士の櫻」を贈る。L.1.
89. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
90. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
91. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
92. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
93. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
94. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
95. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
96. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
97. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
98. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
99. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.
100. 仁に「萬士・櫻十枝」を贈る。L.1.

表3. SP246 土層注記 (Fig. 16)

SC003aは、南北3.3~4.0m（東辺が広い）×東西3.3m、N（真北）-17.5°-Wである。
SC003bは、南辺で壁と壁溝にずれがあり、北辺で壁溝が重複するので（新相は東半が003aと重なるか）、新古2段階がある。**003b古**は南北4.75×4.7m、**003b新**は4.8×4.7mで、方位はN-17°-Wである。

SC003cは、北東調査区北側検出の壁周溝痕跡ライン(PL.8-2・4)が北辺の可能性もあるが、西辺(北西隅)に矛盾が生じ(Fig.13「ロ」)、ならば003b北西隅外側にある壁周溝痕跡が北辺を示すとみられる。その場合、南北4.5~5.25m(東辺が広い)×東西4.95m、方位はN-19°-Wである。**SC003e**は003cと同じ可能性もあるが、別の一時期とした場合、003c北辺東側の「イ」の段差が南東隅となり、北東隅「ロ」と結ぶ線が東辺となろう。南北4.8~5.5m(東辺が西辺より長い)×東西4.15m、方位はN-18.5°-Wとなる。

SC003d(PL.7-10, PL.8-1)

～3) は、北東調査区東側で

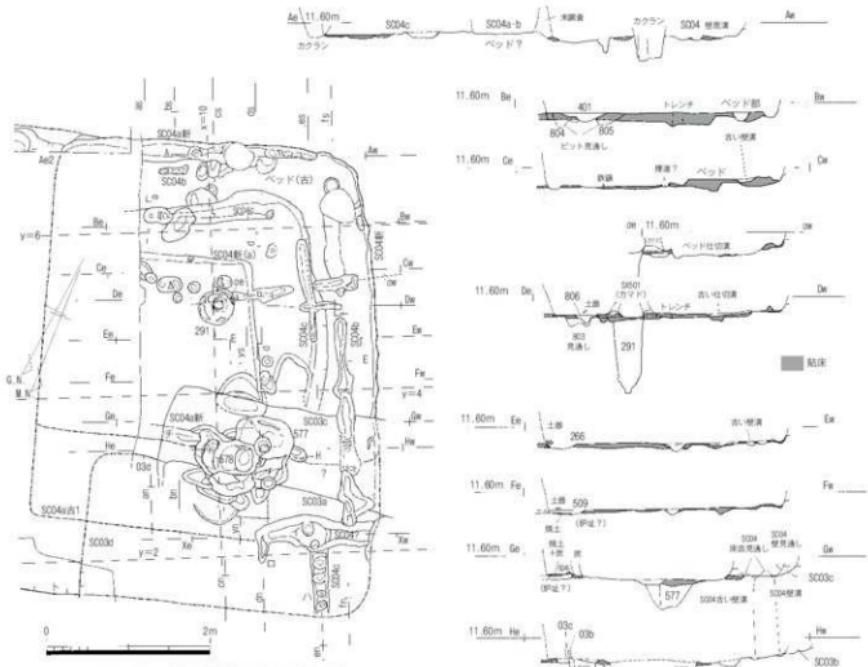


Fig. 20 SC004掘方平面図 (1/60)

大半を検出したが (SC007ベッドを切る), 003a~cの西辺外側で南辺の一部を検出している (ただし調査中は、逆方向のSC004北辺と誤認した)。また北東調査区北側で「SC003b古 (またはSC003e)」とした壁周溝痕跡ラインは、003dの延長の可能性もある。その場合、西辺 (南北) 4.6mで、東西はおそらくSC003a西辺前後が西辺になり、東西4.0m前後だろう。方位はN-25.5°-Wである。

土層観察や平面の精査から全体的に貼床 (地山ローム土) があったが総じて薄く、SC003北半の一部は検出時のミスで貼床面が分からず掘削していたこともあり (検出面直下で床面)、検出時に主柱穴と考えた箇所や当初縦横に設定したベルトと貼床が認識しやすかった南半の一部以外では、掘方まで下げて調査した箇所が多い。なお一部 (SC003aの南東1/4あたり) の貼床は、粗砂礫混じりであった。掘方 (PL.6-3・4) だが、その底面での全体図はあまり差異がないので提示しなかった (断面図Fig.14・15参照)。また南半の掘方底面は、下部のSC004掘方底面との区別が不明確である。さらにSC003の南東隅周間はSK507があったため、その記録後、調査時間の制約から下部の土坑まで一気に掘削し、SC003の床面や掘方を精査していない部分がある。

住居内にはしっかりした柱穴が複数あるが (SP286, 256, 239, 246, 244, 240, 241, 1021)、二本柱や四本柱で組み合う柱穴が明確ではない。このうち、新しいSP239・241 (廃棄時に柱を抜いたためにSC003aの壁や壁溝を切る) はSC003aに伴う。東側に対向する柱穴があれば四本主柱になるが、ならない。またSP1021はSC007に、SP286 (PL.6-2) はSC004に伴う可能性がある。残りの256・246・244・240



Fig. 21 SC004断面図 (E-W) (1/60)

は主柱穴となるか不明確である。しかし柱穴の深さが近いSP256(PL.5-6)とSP240が組み合うならば、SC003bの二本主柱となるだろう。残りのSP244とSP246は特異な廃棄状況(後述)であり、主柱ではないだろう。SP003cの主柱は、平面プラン上SC003bと同じSP256-SP240でもよい。SC003d(=003e?)・003fの主柱穴は不明であり、主柱構造に依らない堅穴建物の可能性がある。なおSC003南東部の土

坑群(577,578,581など)は、実際はSC003以前の下部遺構であり、主柱にはならない。柱穴のうち、SP244(Fig.16, PL.5-4)は、中層中央の柱抜き痕上部で焼土ブロックが多数出土し、柱を抜取り後に

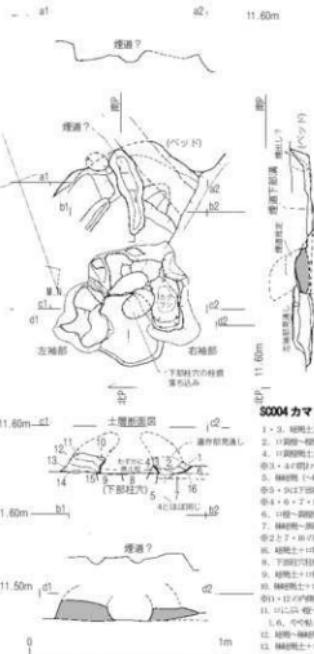


Fig. 22 SC004カマド(?) SX501実測図(1/25)



Fig. 23 SC007実測図(1/60)

火を使うような祭祀が行われたとみられる。また土層ベルトの観察から、古い床面を切り、覆土は新しい床面に覆われている。SP246(Fig.16, PL.5-5)は、中層で中央にしまりある堅いローム土が円形に検出され、これを地山と誤認し、周囲のしまりが甘い埋土を先に掘削した。判断に迷ったが(図面ではローム地山塊を山状に書いている)、おそらく柱の抜き痕に、締め固めた地山土を意図的に埋めたのだろう。SP246も古い床面を切り、新しい床面が覆う。さらにSP244を覆う貼床にさらに覆われており、SP246→SP244の新旧となる。しかしいずれもどの時期の住居に伴うのかは不明確である。

SC003床面には、「炉址」の可能性がある焼土粒混じり(炭粒も混じるものあり)の浅い凹みが複

数箇所あった (Fig.13の網掛け部分)。SX503・510・502・509・505・506・550である。すでに述べたように、貼床を剥がして調査した部分が多いので、建替の各時期 (6時期?) に対応する可能性もある。SX502は、掲載図 (Fig.13) ではSP256に切られたようになっているが、実際は256が埋まつた後の遺構であり、最終段階 (SC003a) の炉址であろう。SX506 (Fig.11右, PL.5-8) は、他よりやや深めの掘り込みがあり、炭粒もやや多かった。土層を見ると2時期ある可能性があるが、SC003のどの時期に伴うかは不明である。これは他の推定炉址も同様である。また各炉址の位置は、必ずしも住居中央ではない。

SX505 (Fig.17左, PL.5-7) は、「炉址」としたが、他の推定炉址の焼土粒 (明赤褐色土) よりもより真紅色かつきめ細かい粒子の暗赤色土が集中しており、肉眼観察から赤色顔料 (ベンガラ) を集積した凹みの可能性を考えた。検出状況から最新のSC003aに伴うものか。赤色土はサンプルを採取し、報告書作成過程で蛍光X線分析をしたところ (福岡市埋蔵文化財センターの田上勇一郎による)、鉄分 (Fe) のピークが突出しておりベンガラとしてよいと思われたが、同じSC003内で他の焼土粒を含む土壤サンプルの蛍光X線分析でも同様の元素スペクトルがみられたため、結論は保留している (覆土土壤の全てが鉄分が多い可能性もある)。SC003床面の土壤サンプルは他にも複数あり、さらに分析して対照すること、顕微鏡下で他の確実なベンガラ資料と粒子を比較することなどが必要だが、今後の課題としたい。

SC003の時期は出土土器 (Fig.37-2~13) から、古墳時代前期前葉新相～後葉古相頃 (II C期～III A期古相) であろう。SC003bに伴う可能性があるSP256の土器はII C期である。

・SC004 (Fig.18~21, PL.6-5・6)

本調査区東側、SC003の南側の堅穴住居である。この住居跡も複数の住居プランの蓄積であり、建替痕跡があるが、南辺と西辺は外縁線が最も新しく、これをSC004a新とする。004a新は南側に幅100cm前後のベッド状遺構があり (ほぼ貼床盛土による)、南西側はすこし北に折れ曲がって終わる。004a新には、ベッド内側の土間部北東隅角に、

カマドの可能性が高いSX507がある (後述)。また主柱は不明である。004a新は、南東隅は工事

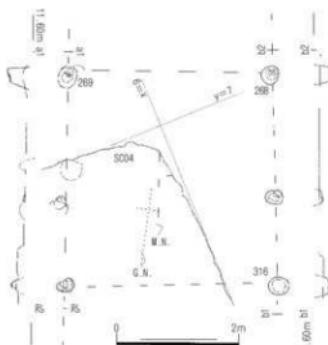


Fig.25 SB01実測図 (1/80)



Fig.26 SB02実測図 (1/80)

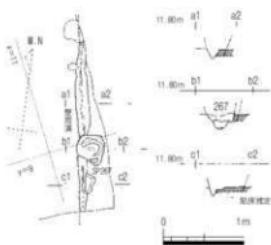


Fig.24 SC005実測図 (1/60)

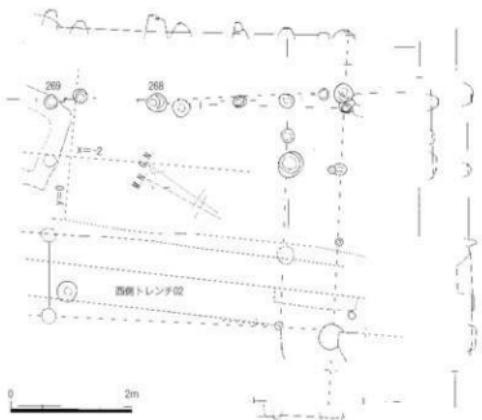


Fig.27 SB03実測図 (1/80)



Fig. 28 SB04実測図 (1/80)

位はN(真北) -25.5°-Wである。SC004にも度数の建替があるが、方位がほとんど変化していない。

次にSC004a新と南辺が一致するSC004a古1と004a古2を想定する。いずれも南東側を立会南東トレンチで確認した(PL.8-11)。SC004a古1はトレンチの「ホ」、SC004a古2は「ヘ」を南東隅とする。

SC004a古1の北辺はSC003下部で検出された溝状凹みの「イ」であろう。この場合、南北4.85m×東西4.7~5.0m(北辺が広い)となる。SC004a古2の北辺は、立会北東調査区東側でSC007を切る「ト」

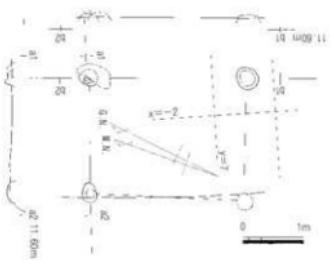


Fig.29 SB05実測図 (1/80)

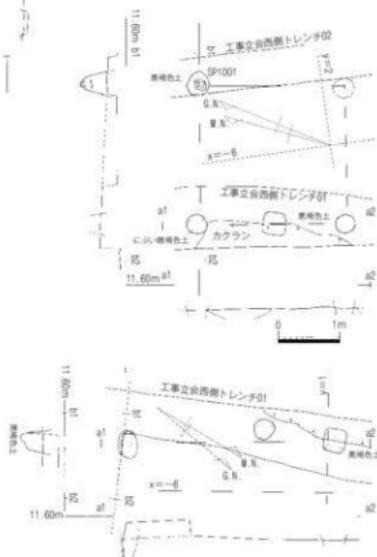


Fig. 30 SB06(上)・SB07(下)実測図 (1/80)

立会南東トレンチの「ホ」の部分と思われる(掘方の角がある)、北側はSC003北辺内側下部の「リ」と炉址SX504の南側の「チ」の遺構線辺ラインを結んだ線であろう。南北3.75m×東西3.7~4.2 (?) m(北辺がやや広いか)の小型住居となる。方位

(PL.8-1) の線上と想定するが、後述のSC004cの北辺も同じだろう。この想定から、南北5.65m×東西5.7~6.2m(北辺が広い)のやや大型の住居となる。以上の想定では、004a古2→004a古1→004a新の順に住居プランが縮小する変化となる。またSC003下部検出の「ロ」の凹みは、004a新のベッド南西隅からの延長線上で、これが繋がるなら004a古2の段階は西側に広くベッドがあった可能性がある。またSC004a新に伴うSX507の下部には柱穴SP291があり、これはSC004a古の主柱の一つとなる。対応する北側の主柱は(Fig.18・20に図示なし)、SC003南東下部のSP286(Fig.13参照、PL.6-2)と、SK508下部にあるSP575(断面図Fig.14・15を参照)であろう。SP575=SC003a古1、SP286=SC003a古2である。

次にSC004a新のベッドと掘方西縁に、一回り小さい範囲を囲む壁周溝痕跡がある。これをSC004bまたはSC004古bとする。貼床盛土からなる004a新のベッドに痕跡があり、004b西辺壁溝は004a新のベッド南西側の北を区切る東西仕切溝「ヌ」に切られるので、004a新の直前時期のプランと考えられる。西辺の壁周溝痕跡は、SC004a古1の北辺西隅とした「イ」の壁周溝痕跡より北に延びないから、004bと004a古1の北辺は同じだろう。南辺が一時北側に縮小するが、全体を考えると最も矛盾がない解釈である。この場合SC004bは南北4.7m、東西は東辺が004a新か004a古1と一致するとして、前者なら3.9m前後、後者なら4.6m前後となる。最後にSC004の掘方を掘削すると、SC004a新のベッド下部からより古い壁周溝の南辺と西辺を検出した(Fig.20、PL.7-7)。これをSC004cまたはSC004古cとする。この西辺壁周溝の北側延長線上は、SC003下部検出の小ピットが並ぶ小溝「ハ」になる。「ハ」はちょうど、立会北東調査区のSC004a古2の北辺の延長線上で北側が止まる。つまりSC004cの北辺はSC004a古1と同じであろう。確証はないが、東辺も一致するとみる。すると、南北(4.6~)4.9m(東辺が狭い)、東西5.0~5.7m(北辺が広い)となる。以上の最終的な検討として、SC004c(004古c)→004a古2→004a古1→004b(004古b)→004a新という変遷案を掲げておく。SC004の掘方は、SC003に比べて全体的に貼床が厚い傾向にあり当初の平面と差が大きいので、掘方の平面図を別に掲載した(Fig.20)。

SC004の床面には、焼土粒や炭粒がみられる炉址などの火処痕跡が複数認められた(Fig.18の網掛け部分3箇所とSX509)。このうちSX507(Fig.22、PL.7-1~3、裏表紙右上)はカマドの可能性が高い。住居覆土を少しづつ掘り下げると、ベッド内縁隅角に向く馬蹄形のローム盛土手を検出した



Fig.31 SK507実測図・土壌断面図 (1/30)

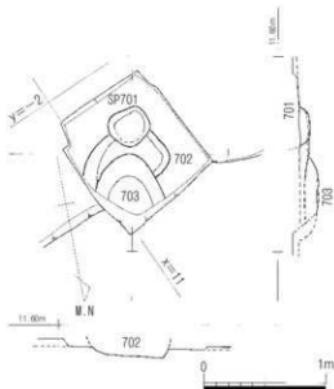


Fig.32 工事立会北側トレンチ
東部拡張区SK702・703実測図 (1/40)

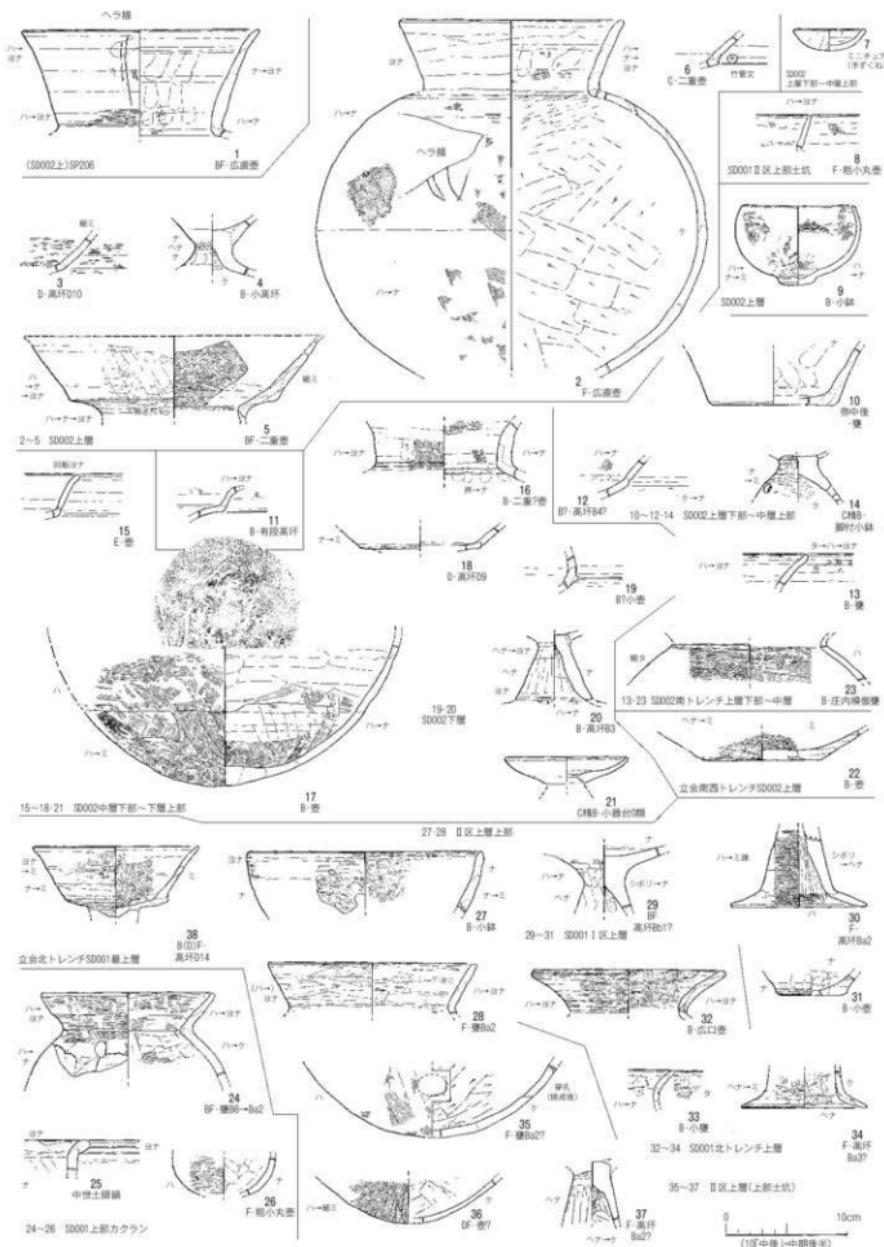


Fig. 33 SD002、SD001上層出土土器実測図 (1/4)

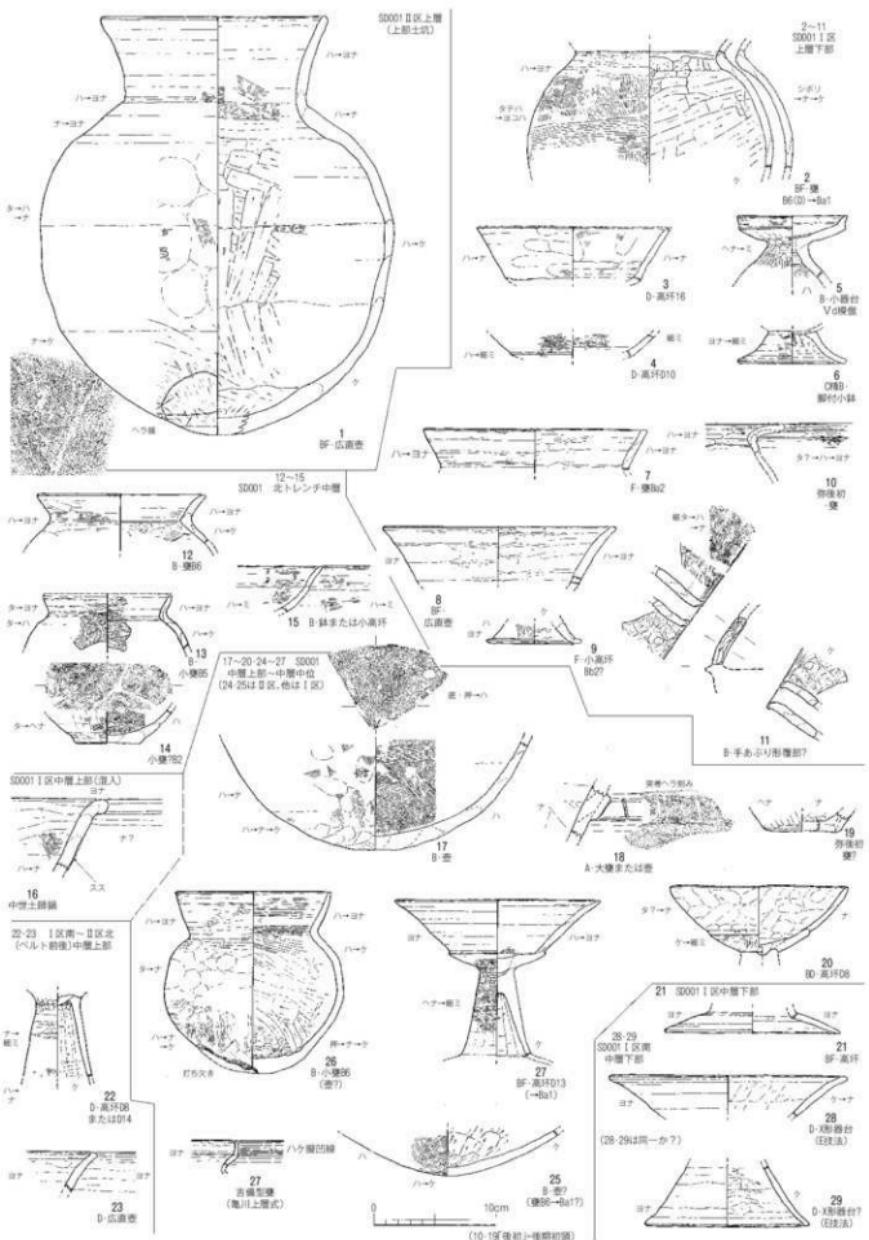


Fig. 34 SD001上層～中層出土土器実測図 (1/4)

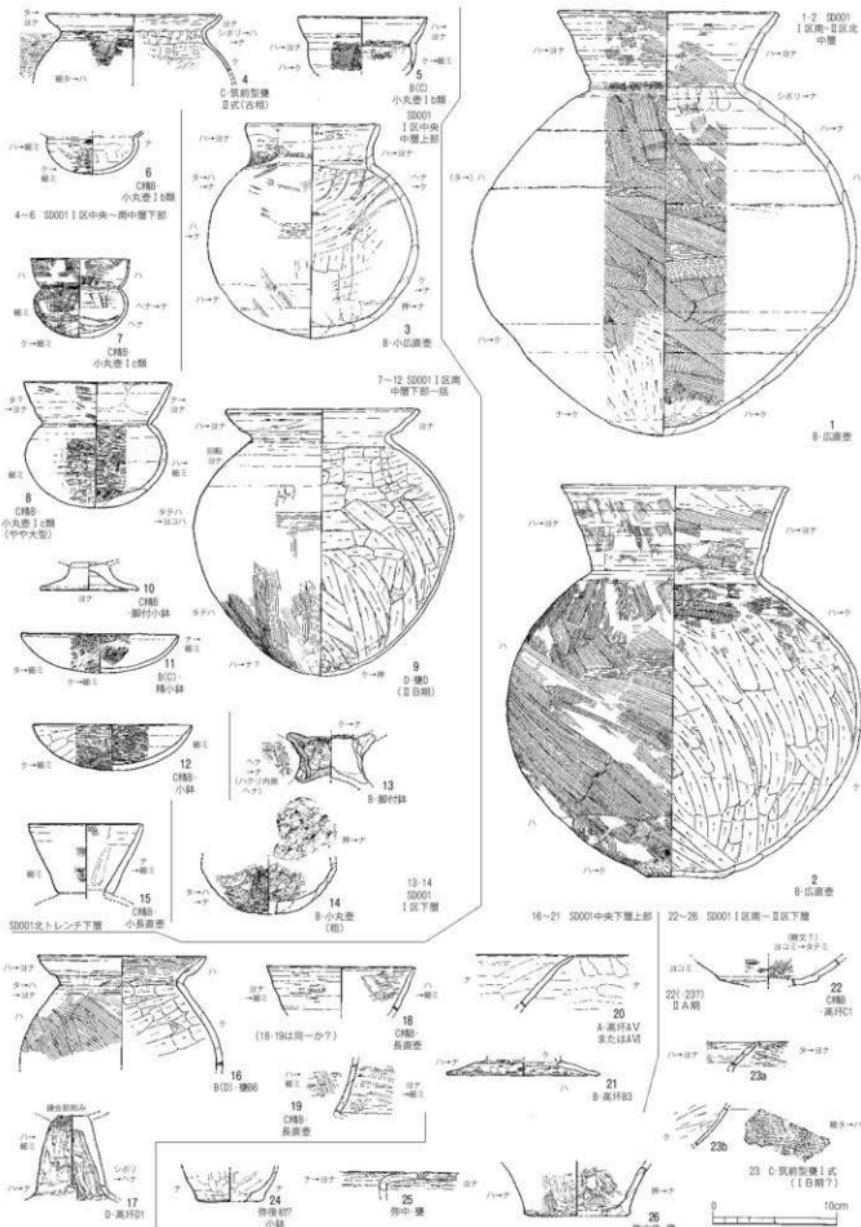


Fig. 35 SD0001中層～下層出土土器実測図 (1/4、一部1/3)

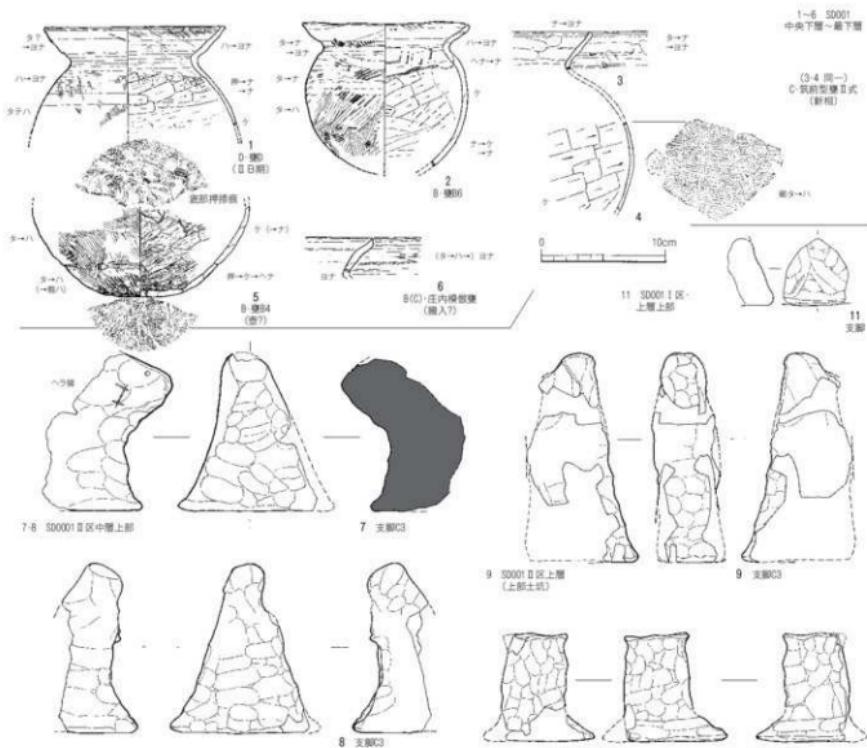


Fig. 36 SD001最下層出土土器、SD001出土支脚形土器実測図（1/4）

(PL.6-7)。馬蹄形土手内側の左右壁面はややオーバーハンギングしており、カマドの横断面形状と同じである。ベッド隅角に向かって幅10cm前後の小溝が床面を走り、そのまま一段高いベッドに向かって立ち上がるが、煙道の下部構造だろう。馬蹄形土手の内側は明確な焼土痕跡はなかったが、内側壁面に僅かに焼土粒が認められた。おそらく火処としての使用回数が非常に少なかったために焼土層(面)が形成されなかったのだろう。

SX507の主軸延長上には、床面から山状に盛り上がった頂部に焼土と炭粒が集中する（断面図 Fig.19のan-as、Fig.21のGe-Gw参照）SX504がある（PL.7-4～6）。床面の凹みという形式の通常の炉址とは異なるが、炉址であろう。この一段高い炉址とカマドの組み合わせは、他に飯倉C遺跡7次調査SC001で検出している（平成25年度調査、未報告）。その他、SX504の南側の床面凹みSX509（PL.7-4・5）と土間部中央西側にも焼土粒が散布し、ある時期の炉址だろう。

SC004の時期は、出土土器から古墳時代初頭～前期前葉古相（II A期～II B期）の幅内である。

・SC007 (Fig.23, PL.7-10, PL.8-1～3) 工事立会北東調査区で検出。西側をSC003、南側をSC004に切られ、調査範囲の制約もあり全体の規模が分からぬが、東西2m以上×南北3m以上である。方位は北辺の直交ラインを基準にするとN（真北）-23.5°-Wだが、ベッド内側南北線を基準とすると31.5°となる。この角度はSD001-SD002の方位に近い。西側に貼床によるベッド状遺構があるが、この途中でSC003dに切られる。予定工事の影響度から、上面確認のみで終わっている範囲が多い。

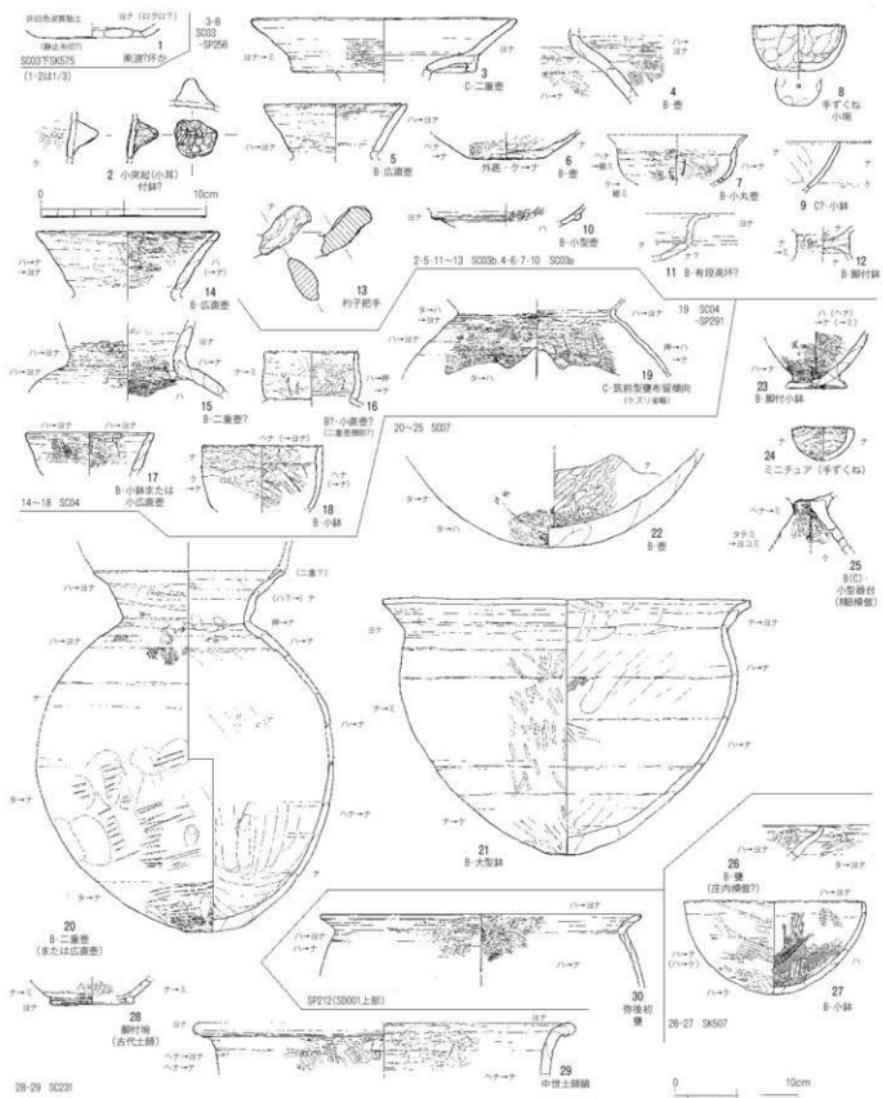


Fig.37 SC003·004·007、土坑(SK)、柱穴(SP)出土土器(1/4、一部1/3)

(Fig.3)。住居北辺に屋内土坑SK801があり(PL.7-11・12)、やや多くの土器が出土した。土坑は57×90cm前後で、床面から15cmの深さである。時期は、屋内土坑出土土器から古墳時代初頭(ⅡA期)である。

- SC005 (Fig. 24) 調査区南東、壁周溝2.2m長のみの検出で規模不明。東側に広がるとみられる。

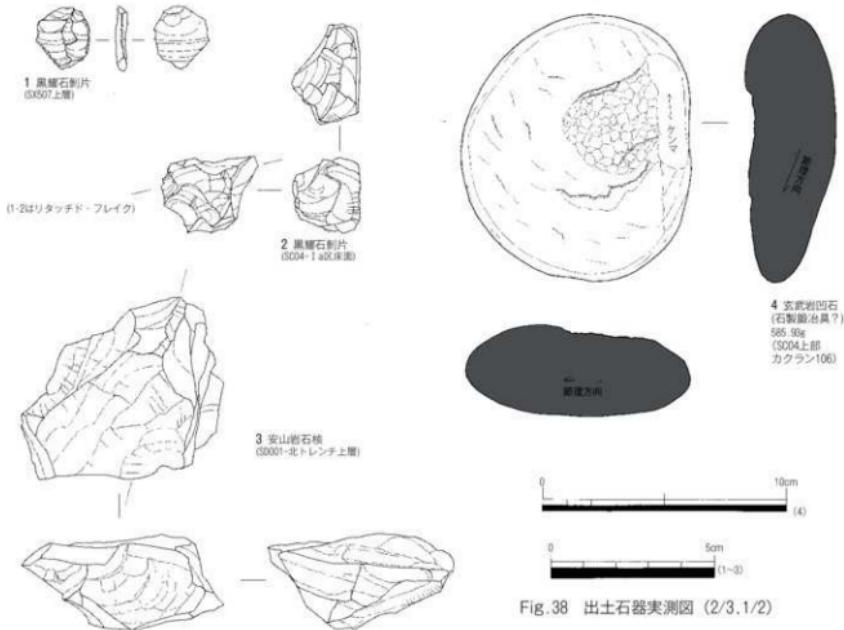


Fig.38 出土石器実測図 (2/3, 1/2)

方位はN-13°-WでSC003aに近く、新しいか。

(3) 掘立柱建物 (SB)

いずれも比較的小規模で、柱穴自体もほとんどが小さい。建物の復元は、整理過程に図上で想定したものが多い。しかし推定方形環溝内にピットが多く、仮設的な小規模建物が何處か建てられたことは認められよう。**SB01・04~07**が古墳時代であり、**SB04~07**は方形環溝に伴うと考える。**SB01** (Fig.25) はSC04を切る 1×2 間 ($3.4 \times 3.5m$) の建物。N (真北基準) -7°-W。古墳時代か。**SB02** (Fig.26) は本調査区北西、方形区画内の 2×5 間 ($4.0 \times$ 推定 $5.9m$) の建物。N-60°-E。**SP231**に中世初期の土師器鍋片があり、**12世紀頃**か。**SB03** (Fig.27) は本調査区北西から西側トレンチ02、方形区画内の3間 (以上?) $\times 3 \sim 4$ 間 + 底部 ($4.0m$ 以上? $\times 4.9m$) の建物。N-36°-W。柱間が不揃いなことや、建物隅角前後には補助柱があり、底部の存在などから、**中世**の建物だろう。**SB04** (Fig.28) は本調査区西側から西側トレンチ01・02まで、方形区画内の 1×3 間 ($3.2 \times 6.4m$) の建物。N-59°-E。**SB05** (Fig.29) は本調査区南西、方形区画内

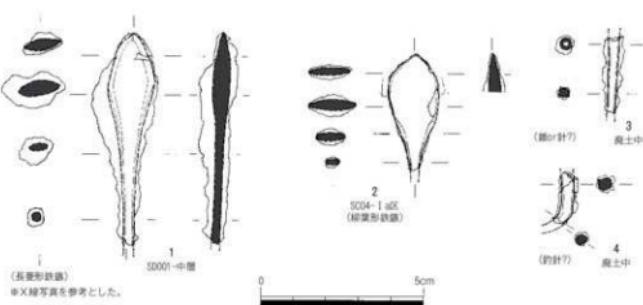


Fig.39 出土鉄器実測図 (2/3)

の 1×1 間($1.9 \times 2.6m$)の建物。N-25°-W。**SB06**(Fig.30上)は工事立会西側トレンチ01・02北部、方形区画内の 1×1 間($2.3 \times 2.4m$)の建物。N-21°-W。黒褐色～暗褐色土の柱穴から構成。**SB07**(Fig.30下)は工事立会西側トレンチ01北部の2柱穴から推定。比較的しっかりした柱穴であり、西側に展開する建物の一部と想定した。 $1 \times ?$ 間($3.4 \times ?m$)。N-40°-W。

(4) 土坑 (SK)

SK507 (Fig.31, PL.7-8・9) はSC003南東部の上から掘り込まれた土坑。80×120cmの楕円形平面、深さ33cm。横断面は西側が緩く、東側が急な立ち上がり。古式土師器の小型鉢が出土 (Fig.37-27)。**SK702・703** (Fig.32, PL.8-12) は北東調査区北側の検出。両者の新旧関係は不明確だが、SK702が新しい可能性が高く、702はSP701に切られる。いずれも黒褐色～暗褐色覆土。遺物少なく時期は不明確。**SC003南東下部の土坑** (Fig.13, 断面図はFig.14のbn-bsおよびFig.15のAe-Aw・Be-Bwを参照) のうち、**SK578**と**SK577** (PL.6-1) は、やや古い遺構の可能性がある (遺物は僅かで時期は不明確)。いずれも底面に柱痕跡があり柱穴と思われるが、竪穴住居の柱穴とは異なる。組み合う柱穴が不明なため、建物の一部かどうかかも不明確。**SK577**は50×70cmの長方形、**SK578**は55×75cmの不整長方形、周囲の検出面からの深さはSK578が約63cm、SK577が約50cm、578が新しい可能性。

3. 出土遺物

以下、詳細に記述する紙幅がなく、器種や出土遺構は挿図中に記した。土器 (Fig.33~37) については、系統・器種分類、整形・調整なども挿図中に記したが、下記の凡例と基準を参照されたい。

＜土器の凡例と編年・分類基準＞ 整形・調整法の記入は略称を用いた。以下の通り。「ナ」＝ナデ、「ヨナ」＝ヨコナデ、「ハ」＝ハケメ（板木柔痕ナダ）、「タ」＝タキ、「ヘ」＝ヘラグ、板ナデ、「ミ」＝ミラギヤキ、研削、「ケ」＝ヘラケツリ、「縫」＝縫耐ヘラミガキ、「継」＝縫耐筋底タキ、「押」＝押捺振、「タ」→「ヨナ」は、タキハ→ヨナミを示す。ヨコナデは回転台使用と不使用があるが区別している。またハケメミラギヤキも一部記載、タケとヨコの区別をしない。これらは本来重要で、古式土器器の「系統」類別基準になる。基本的に精製器種B群は細密なヨコミラギヤキを、D-E系は回転台使用のヨコケ（円錐内筒から外面頭部ないし肩部まで）や外面肩部ヨコケを示す。これが最も欠落しない不分（分類なし）の場合、B系ないしF系ある。『広義』は広口直底「小」は小底型、「直底」は直底「二重」は二重底型、「長直底」は長直底口、「小丸」は小丸足底、「粗」は粗足。『B』は弥生、古式土器師（古墳時代初頭～中期前葉の土器）について、図中の各土器番号に付した、A・B・C・D・E・Fは土器群の製作技法体系「系統」を示す（久住1999）。A系は北部九州在来系、B系は畿内伝統的土器様式（変容度大きい）。C系は庄内系で直底の「庄内型」（大相模系前庭器内張、一部城跡で河内型系）を伴うB系に比して精緻な土器群。精製器種B群「精」とB略とも呼む。D系は土器留式だが、畿内の布留式と異なる特徴あり。高環形態（エンクシス状柱状部の高环D1など）や壺の形態変化が独自など、「北部九州型」で単純な「畿内系」ではない。精製器種はC系から引継がれ、中・大型器種は先行するB-C系器種（主に壺、壺）を以て前庭内張・技法融合して北部九州型布留器となる）形態が山陰系（E系）技法を継承して製作するものと併存となり、小形器種群も山陰系技法による製作がされるが、この状況は畿内の種内系（次章2010）と並行している。E系は除系だが、北部九州ではD系土器群にC系と共に取り込まれている。「F系」は布留式併行後半期から（III期以降）、以前からのB系のD系技法の受容と、D系器種の技法退化（粗雑化）の両者の複雑な融合により形成された古墳時代中期以降土器群である。「BF」とした場合はB系要素が強いもの、「DF」とした場合はF系要素が強いもの。また例えば、「B（C）」とはその系技法による器系器種の横置、「BD」とはB系とD系の系的折衷を指す。亦生年代終末期から古墳時代前期の土器の系統、基本器種群編年、編年は久住1999による。D系高窓の分類補足追加とX型小型器台（D系）の分類は久住2002による。ただしX型小型器台は、精製器種B群系「A類」と、模倣品「B類」があるが、後者は大部分と前部の一部（水道溝・縫耐コヤキを伴うもの）は山陰系技法による「B1類」と、B-F系技法のより粗雑な模倣品「D2類」を区別する。A類とB類の区別は内面ヘラケツリの有無（後者はない）、「びぐれ部内側の大小」(B1類が大きい)による。「B1期」の新古細分は、久住2002、2006参照。精製器種B群（次章2010）の北部九州での「小型丸底壺、瓶」の分類は久住1999・2012を参照。「F系」とした前期末（III期前半期）から中期に統くる器種群分類と編年（中期初頭以降）は、重慶釋行2000による（「重慶編年」）。重慶釋行前半期（中期初頭）は、III期前半期に後続する時期である。なお「重慶編年」の前頭編年は即断が多く伸延しない（久住2001）。その他の、細分類別は小畠弘1989による。

¹² 参考文献は小畠恒巳「『支那舞』について」「吉原」福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集・久住延雄1999「北部九州における庄内式舞行期の土器様相」「庄内式土器研究」XII・久住（編）2002「元安・永曽連鉢舞」福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集・久住2006「土器類から見た古墳時代の吉原古墳の再検討」第9回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集・久住2013「九州における古土器舞の地域間交流によせて」布留中相歩行期と小型九底壺を中心にして「古墳時代の地域間交流」11・第16回九州前方後円墳研究会発表要旨集別刷・重藤邦行2002「福岡県における古時代～中相歩行期の土器舞」「古墳時代中・後期の土器舞」第5回・第10回九州前方後円墳研究会発表要旨集別刷・吉原山古美・山田洋治1993「布留中相歩行期における精製器舞の製作技術」「考古学研究」40-2・三好玄2010「布留中相歩行期精製器舞の構成・前制作精製器舞を中心に」-1「吉原山古美・山田洋治1993「布留中相歩行期における精製器舞の製作技術」「考古学研究」40-2・三好玄2010年記念論文集」-1。

SD002(Fig. 33)の上層(1~6・9)はIII A期～中期初頭。下層下部～中層上部(7・10~12・14)は混在資料。南トレンチ(13, 23)の甕は肥後北部の庄内模倣窯の搬入(36-6も同じ)。中層下部～下層上部(15~18・21)はIII A期(18)からII A期(21)まで幅広あり。下層(19~20)はII A期。南西トレンチ上層(22)のB系窯は器壁薄めの広い平底でIII A期に多い(35-2, 37-6も同じ)。**SD001**(Fig. 33~24~Fig. 36)の上層上部と土坑(33~24, 33~27~30, 35~37, 38, 34~1)は中期初頭。I区下層下部(34~21~11)はIII A期新相～中期初頭(古相混入あり)。中層上部～中層中位(34~17~20, 25~27, 35~1~3)はIII A期新相(一部古相混入)。I区中層下部は、II A期古相(33~21, 28~29)とII B期やや新相(35~5~12)がある。筑前型庄内甕(35~4, 23, 36~3, 4)はI B～II A期。中央下層上部(35~16~21)はII B期。中央下層～最下層(36~1~3, 6)はII B期やや古相。**SC003**の二重口縁甕(37~3)はII C期で三雲嵩山古墳に類似。小耳付鉢(37~2)は鶴島半島系の模倣か。**SK575**の小片(37~1)は灰白色泥質土の楽浪土器塊壊類であろう。器面が荒れ残りが悪い。**SC004**の布留傾向甕(37~19)は内面のケズりを省略するが(庄内甕では稀にあり)薄い器壁。外側調整と土台等の類似個体(内面ケズりがあり)は三雲サキゾ \neq SC01上層にある(II A期)。石器のうち凹石(38~4)は鐵錆が付着し、**鍛冶工具石**か? 黒曜石削片類は弥生時代前半期(38~1~3)。石器には他に網刀剥片的可能性がある黒曜石片がある。鐵器のうち長方形鏡(39~1)は韓島南岸部系の可能性。『廢寺中』とあるのは、弊穴式住居またはSD002、003に伴う可能性が高い。

本報告では、諸般の事情により「まとめ」(小考)を書けなかったが、20m程度の方形区画環塁の類例は古墳時代前期に多く、「首長居館」とするには小規模であり、区内建物は無いか小規模で貧弱な場合が多い。本例も含め、「祭祀場」が含まれるだろう。